



“読み困難”の背景要因と支援 ①

前号で紹介した高橋あつ子先生の「学校で教師ができるアセスメント」には、学習面・行動面の困難のある領域ごとに、つまずきの要因を明らかにする課題分析と、それを踏まえた支援が記されていて参考になります。その中から本号では**読みの困難**を取り上げます。

教師が「この子は読むのが苦手」と知るのは、多くの場合、授業での音読場面、それも順番や指名によって皆の前で読む場面を通してではないでしょうか。このとき、「スムーズに読めないのは練習不足、努力不足のせい」「皆の前で恥ずかしい思いをすることが“薬”となってやる気を出してくれれば…」と、生来の特性上できない子をさらし者にしてしまうような対応は、嫌な思い出、傷付き体験、勉強嫌いの助長にしかありません。読みに苦戦していることは集団読みでの目や口の動き、そばに寄っての聞き取りで把握することができるものです。

「読み」には、文字を音に変えて発声する**音読**と、意味を理解し推論する**読解**があります。“読む、読み取る”の情報処理のプロセスをたどり、それぞれに必要な能力をまとめると次のようになります（下表の①から順に、浅い処理から深い処理へ、実際は瞬時に進みます）。

読みのプロセスと必要な能力	すること	必要とされる主な能力
	① 目を向ける	眼球運動（上下左右の滑らかな動き 遠近のピント調整）
	② 読む箇所以外を捨てる	選択的注意（見るべき箇所を浮き彫りにする…図と地の弁別）
	③ 形を見る	何かがかたどられていると認識 形を捉える（空間認知）
	④ 字を見る	単なる形や絵でなく文字として認識（文字の知識）
	⑤ 字を音に変える	文字－音対応の知識 デコーディング（字を音に変換）
	⑥ 目を動かす	眼球運動（上下左右の滑らかな動き）
	⑦ 単語を塊でつかむ	脳内の語彙（単語）リストとの照合、選択
	⑧ 単語を音に変える	規則（アクセント）に従って音声化
	⑨ 単語を意味に変える	語彙リストからの想起（意味を理解している語彙との照合）
	⑩ 目を動かす	眼球運動（滑らかな動きによって単語、フレーズを瞬時に把握）
	⑪ 文章を読む	なめらかな音声化（イントネーション）
	⑫ 文章を意味に変える	語彙力 文法・構文知識 流暢性
	⑬ 文脈から意味を考える	背景となる知識 推察力 ワーキングメモリ（情報を一時的に記憶して、思考、意思決定などの認知機能を実行）

ここでは音読のうち①～④の浅い処理におけるつまずきの要因を取り上げます（黙読も同様）。

読む際に目が彷徨う子や、頭が上下（縦書き）左右（横書き）にやたら動く子は、眼球の動きが円滑でない可能性があります。読んでいるうちに行が飛んでしまうことが多い子は、図（見るべきもの）と地（背景）の弁別に問題があるのかも知れません。読むべきところに対して選択的に注意が向かず、全部が目飛び込んでしまう子や、文字列が重なって見える、文字が歪んで見えてしまう子もいます。視覚過敏があって、白色の用紙を見るのが眩しかったり、文字の黒色とのコントラストが過剰に強く不快に感じられたりする場合もあります。



これらの特性があると、たとえ語彙が豊富で言語理解の能力が十分でも、音読は容易ではありません。起因する問題に応じた指導の工夫が求められます。

（次号に続きます）

担当：学校生活適応支援アドバイザー 飯山・大瀧
TEL 639-4392 / 支援要請は 639-4381 諸伏・石川